

渡辺玄対筆「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」の制作について

中村真菜美（大阪大学、日本学術振興会特別研究員（DC））

明和四年（1767）、熊本宇土支藩五代藩主・細川興文（1725-1785）は領内の桂原（現在の宇城市不知火町長崎桂原）に隠居所・蕉夢庵を構えることを決め、庵内と周辺の眺望から「十五景」および「九勝地」を選定した（『蕉夢庵記』）。本発表で取り上げる「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」（宇土市教育委員会蔵、宇土市指定文化財）は、その佳景を称えるべく、計九名もの大名や文人が漢詩を寄せ、関東文人画の先駆者・渡辺玄対（1749-1822）が「蕉夢庵図」と十五景に基づく全十五図（以下「十五景図」と総称する）を描いた。陸奥泉藩藩主・本多忠如による識から、明和八年冬頃成立と推定される。

本図巻がどのような経緯で制作され、玄対の画歴においてどのような位置づけにあるのかは必ずしも明らかではない。そこで序跋や題詩を整理し、興文も属した服部南郭や高野蘭亭を中心とする古文辞学の交友圏が根底にあることを指摘する。玄対もまた実兄で儒者の内田鶴州（1736-1796）や増上寺周辺で盛んに開かれた詩会や画会を通じて漢詩人達と密接に交わっており、そこで培われた高い教養は制作活動の核であったと考えられる。「蕉夢庵図」では興文が記した設計書を参考に現実性を意識しながらも、豊かな色感で詩的空間を演出し、「十五景図」では各図に記された興文の題詩を的確に解釈し、季節や天候、時間帯による些細な光の変化までも具体化しようと試みている。

次に本図巻が明代蘇州で制作された卷子および画冊形式の別業図両方の影響下にあることを示す。全景を俯瞰する「蕉夢庵図」を中心に題、散文体の記と複数の詩を収める構成は卷子形式の別業図を踏襲するが、庵周辺の眺めを細かく描き出す「十五景図」は、杜瓊「南野別墅図冊」（上海博物館蔵）や沈周「東荘図冊」（南京博物館蔵）のような画冊形式の別業図に通ずる内容である。図様では「十五景図」内「桂源泉聲」が「南野別墅図冊」の「閩楊樓図」や文徵明「石湖清勝図巻」（上海博物館蔵）と類似するなど、玄対が呉派の表現上の特質を理解し、意図的に活用していたことが指摘できる。一方で「蕉夢庵図」のもつ現実性への志向や構図においては池大雅「楡枋園図巻」（大徳寺蔵、安永元年（1772）頃）に最も近似している点は看過できない。そこで、近年明らかにされつつある江戸中期における明代蘇州園林画の受容の実態を、関東文人画の形成における大雅ら京阪圏の画人の影響といった問題も視野に入れて考察したい。

最後に、僧・玄廣による跋文から、制作背景に領内巡見があったことを読み解き、民を慈しみ風流を愛するという当時の理想の藩主像を実現する上で、領地を題材とする絵画が重視された可能性を提示する。「十五景図」に様々な民の姿が現れるなど、本作には興文の為政者としての意識が反映されていると思われる。